

# 令和5年度 教育事業等報告書



独立行政法人 国立青少年教育振興機構  
国立赤城青少年交流の家

# 目 次

## 1 青少年教育に関するモデル的事業

・あかぎ無限大キャンプ(ボランティア研修)	2
・あかぎ無限大キャンプ(事前キャンプ)	4
・あかぎ無限大キャンプ(本キャンプ)	6
・あかぎ無限大キャンプ(事後キャンプ)	8
・地域探究プログラム オリエンテーション合宿 in 赤城	10

## 2 社会の要請に応える体験活動等事業

・親子キャンプ 秋編	12
・親子キャンプ 新春編	14
・幼児教育指導者のための防災研修会	16
・あかぎ防災キャンプ	18

## 3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

・あかぎつつじキャンプ①	20
・あかぎつつじキャンプ②	22
・あかぎオータムキャンプ	24

## 4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

・ボランティア養成セミナー	26
・自然体験活動指導者(NEALリーダー)養成事業	28
・利用団体のための研修会	30

## 5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業(交流の家実施主体事業)

・群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動推進事業	34
・あかぎフェスタ2023	36
・さくらフェスタ	38

## 6 その他

・地域との合同防災訓練	39
-------------	----

## 1 青少年教育に関するモデル的事業

### 「あかぎ無限大キャンプ（ボランティア研修）」

#### 1. 趣 旨

あかぎ無限大キャンプに参加するボランティアや社会教育実習生を対象に安全管理やボランティアの役割等に関わる講義や登山・野外炊事等の実習を通して、本キャンプに備えた準備を行う。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期 日

令和5年7月1日（土）～7月2日（日）【1泊2日】

##### (2) 参加者

- ①参加対象 あかぎ無限大キャンプ
- ②参加人数 学生サポーター：1名 法人ボランティア：3名 社会教育実習生：3名  
計7名

#### 3. 企画運営のポイント

- (1) あかぎ無限大キャンプに向けて、野外炊事・登山についての基本的な知識や技能を見に付け、ボランティアとしての役割を理解し、心構えをもてるよう企画した。
- (2) ボランティアが見通しと余裕をもって事前キャンプに臨めるように、事前キャンプの内容に沿った研修内容と事前キャンプ細案の読み合わせを行った。

#### 4. 日程

	午 前	午 後	夜
7月1日 (土)	集合 自己紹介・アイスブレイク 説明「事業概要説明」 講師：当所職員 中山 太平 講義「青少年教育施設におけるボランティアの役割」 講師：当所職員 竹内 正則	演習「アドベンチャーラリー」 「テント設営の方法」 講師：当所職員 中山 太平	演習「野外炊事」 講師：当所職員 中山 太平
7月2日 (日)	演習「つどい・退所点検の仕方」 講師：当所職員 平澤 輝樹 小林久瑠美 実技「登山」 (覚満淵～鳥居峠～長七郎～小沼)	説明「事前キャンプ細案読み合わせ」 講師：当所職員 中山 太平	

## 5. 主な活動内容



「開会式」



「アイスブレイク」



「ボランティアの役割」



「テント設営の方法」



「野外炊事」



「赤城山登山」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足：6名（100%） やや満足：0名 やや不満：0名 不満：0名

### (2) 参加者の声

- ・実際に野外炊事でカレーをつくることで、教える側になったときにボランティアとしてどのように関わったらいいかを考えるきっかけになった。
- ・キャンプのねらいを知り、子供とどのように接すればよいか考えることができた。
- ・長期のキャンプに参加するボランティア同士で交流することができたこと、ボランティアに関する知識をたくさん得ることができ充実していた。

### (3) 成果

- ・実技に関する研修を通し、「予測されるケガや事故をイメージできた。」との感想が多いことから、有効であったと考えられる。
- ・登山を通しボランティア自身の体力把握ができ、子供たちとの登山についても見通しをもたせることができた。

### (4) 課題

- ・子供との接し方については漠然とした不安を抱えるボランティアが複数見られたので、講義などを通し、少しでも解消できるような配慮が必要である。
- ・本キャンプで実施予定のプログラム数を考えると、1泊2日の研修ではすべてを網羅することは難しい。プログラムの危険度やけがのリスク等を考慮し、ボランティア研修で実施するプログラムの精選が重要である。

担当：企画指導専門職 中山 太平

# 「あかぎ無限大キャンプ（事前キャンプ）」

## 1. 趣 旨

本キャンプに向け、心身の準備を整えるとともに、キャンプについての基本的な知識技能の習得を目指す。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和5年7月8日（土）～7月9日（日）【1泊2日】

### (2) 参加者

①参加対象 小学5～6年生24名（男子12名、女子12名）

②参加人数 小学5年生男子：4名 小学6年生男子：8名

小学5年生女子：7名 小学6年生女子：5名

群馬県：11名 埼玉県：6名 栃木県：2名 茨城県：2名 千葉県：2名

東京都：1名 計24名

## 3. 企画運営のポイント

(1) 本キャンプに向けて、心身の準備を自分なりに考えられるように本キャンプで実施する日程・プログラムを中心に計画した。特に登山・野外炊事について安全確認を行い、基本的な知識・技能の習得ができるよう実施した。

(2) プログラムごとにチームを編成することでより多くの参加者同士が交流できるよう配慮した。また、チームリーダーであるボランティアも活動ごとに変え、多くの参加者の実態把握ができるよう配慮した。

(3) アイスブレイクでは、ボランティア主体のアイスブレイクを中心に実施し、ボランティアが参加者の実態把握ができるよう配慮した。

## 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
7月8日 (土)	受付 開会式 自己紹介・アイスブレイク 昼食	レクリエーション 眼の検査	野外炊事 ふりかえり
7月9日 (日)	朝のつどい 朝食 登山 (覚満淵～長七郎～小沼) 昼食 (小沼湖畔)	ふりかえり アンケート 解散	

## 5. 主な活動内容



「開会式」



「アイスブレイク」



「野外炊事」



「朝のつどい」



「登山（覚満淵）」



「登山（長七郎山）」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 21名 (88%) やや満足 3名 (12%) やや不満 0名 不満 0名

### (2) 参加者の声

- ・はじめは緊張したけれど、アイスブレイクやレクリエーションで仲良くなれた。
- ・初めて会った人と自己紹介やゲームができてとてもよかった。
- ・かまどで火を使ってカレーを作るのは初めてで難しかったけど上手にできた。
- ・みんなで作ったカレーがおいしかった。
- ・みんなで協力して登山ができた。山頂から見た景色がきれいだった。登ったかいがあった。
- ・登山ではみんなで声を掛け合いながら山を登ったり休憩したりすることができた。
- ・ボランティアさんは優しくてそばにいてくれて安心した。
- ・不安なことや心配なことがあるとスタッフがすぐに教えてくれた。

### (3) 成果

- ①ボランティア中心のアイスブレイクでは、「楽しくて初めて会った人ともすぐ仲良くなれた。」との感想から、スムーズな仲間づくりにつながった。
- ②活動ごとにグループを編成したことで、ボランティアが参加者の実態把握ができ、参加者同士が交流を深めることにつながった。
- ③プログラムに関する回答では、野外炊事に関する技能や登山の体力配分に関する記述が多く、基本的な知識・技能の習得につながった。
- ④本キャンプに向けて、自己の体力や野外炊事での改善点など課題を見つけ、本キャンプに生かしたいという前向きな感想が多く、本キャンプに向けての期待が高まった。

### (4) 課題

- ①感染症対策はもちろんのこと、暑さへの対策が必須である。本キャンプではゆとりあるプログラム編成や班付きボランティアとの連携を十分に図り、熱中症予防に努める必要がある。
- ②施設利用の仕方については、全体のオリエンテーションが行えなかった。プログラムを見直し、必要最低限の施設の使い方については説明が必要だと感じた。

担当：企画指導専門職 中山 太平

# 「あかぎ無限大キャンプ（本キャンプ）」

## 1. 趣 旨

- (1) 協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- (2) 長期自然体験活動を通して、近視進行の抑制（健康の保持増進）を図る。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和5年8月13日（日）～8月20日（日）【7泊8日】

### (2) 参加者

- ①参加対象 小学5～6年生24名（男子12名、女子12名）
- ②参加人数 小学5年生男子：4名 小学6年生男子：8名  
小学5年生女子：7名 小学6年生女子：5名  
群馬県：11名 埼玉県：6名 栃木県：2名 茨城県：2名 千葉県：2名  
東京都：1名 計24名

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 本キャンプの日程を「セカンド【獲得・グループ】」「サード【成長】」と2つのステージに分け、参加者にステージのねらいを意識させながら実施した。
- (2) 「セカンド【獲得・グループ】」ステージでは、グループで活発に協議・活動するグループタイムを設定することにより、お互いを認め合う活動を実施した。
- (3) 「サード【成長】」ステージでは、個人で登山のコースを選択する赤城山選択登山を設定することにより、個人の成長を実感できるような活動を実施した。

## 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
8月13日 (日)	・開会式 ・アイスブレイク	・チームミーティング① ・眼の検査 ・野外炊事	・チームミーティング① ・ふりかえり
8月14日 (月)	・オリエンテーリング	・テント設営練習 ・かんな箸作り	・登山安全確認 ・ふりかえり
8月15日 (火)	・赤城山チーム登山 (悪天候のため覚満淵散策)	・チームミーティング②	・ふりかえり
8月16日 (水)	・グループタイム ・テント設営	・グループタイム	・登山ミーティング ・ふりかえり
8月17日 (木)	・グループタイム ・うどん打ち体験	・チームミーティング③	・登山安全確認 ・ふりかえり
8月18日 (金)	・赤城山選択登山	・赤城山選択登山	・ふりかえり
8月19日 (土)	・キャンプのまとめ ・発表準備	・眼の検査 ・パーティ準備 ・お別れパーティ	・ふりかえり
8月20日 (日)	・ふりかえり ・閉会式		

## 5. 主な活動内容



「野外炊事」



「オリエンテーリング」



「テント設営練習」



「チームミーティング」



「グループタイム」



「赤城山選択登山」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足21名(88%) やや満足3名(12%) やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・初めて会う友達とも協力して活動することで仲良くなることができた。
- ・1週間のキャンプは初めてだったが、いろいろな活動ができてよかった。
- ・みんなで協力する活動がたくさんあり、チームや参加した人との友情を感じることができた。
- ・学校と違い、決まった日程だけでなく自分たちで考えた活動に取り組むことができた。
- ・この1週間で家ではできない体験がたくさんできてよかった。
- ・意見がぶつかったときは分かり合えるまで話し合うことが大切だと思った。

### (3) 成果

- ①ステージごとにねらいを設定するプログラム編成を行ったことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ②参加者アンケートで、「グループで分かり合えるまで話し合うことができた。」「みんなで協力する活動で友情を感じることができた。」等の感想から、グループでの話合いやグループタイムを設定したことでグループ内での多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながった。
- ③1カ月後の保護者アンケートより、「進んで家事に取り組むようになった。」「学校生活で自ら役員に立候補する姿が見られた。」等の感想が見られた。本事業の経験が参加者の主体的・自発的な行動につながった。

### (4) 課題

- ①グループでの話合いがより意味のあるものとするための課題解決的なプログラムの設定や提示が必要となる。
- ②参加者自身の成長を具体的に感じることでできるプログラム、場の設定の工夫が必要である。

担当：企画指導専門職 中山 太平

## 「あかぎ無限大キャンプ（事後キャンプ）」

### 1. 趣 旨

参加者にキャンプをやり遂げたという達成感を味わわせるとともに、自身の変化や成長を見つめる機会とする。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期 日

令和5年9月16日（土）～9月17日（日）【1泊2日】

#### (2) 参加者

①参加対象 小学5～6年生22名（男子11名、女子11名）

②参加人数 小学5年生男子：4名 小学6年生男子：7名

小学5年生女子：6名 小学6年生女子：5名

群馬県：10名 埼玉県：5名 栃木県：2名 茨城県：2名 千葉県：2名

東京都：1名 計22名

### 3. 企画運営のポイント

(1) 取組発表を行うことで、本キャンプ後の自身の成長や変化について参加者が把握できるよう配慮した。

(2) 既習のキャンプ技能を発揮する場として野外炊事を設定することにより、自身の成長を実感できるよう企画した。

### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
9月16日 (土)	受付 開会式 本キャンプのふりかえり 昼食	チームミーティング 選択レクリエーション 眼の検査	野外炊事 たき火 ふりかえり
9月17日 (日)	朝のつどい 朝食 アドベンチャーラリー 取組発表準備	取組発表 ふりかえり アンケート 閉会式 解散	

## 5. 主な活動内容



「チームミーティング」



「選択レクリエーション」



「野外炊事」



「たき火」



「アドベンチャーラリー」



「取組発表」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 21名 (95%) やや満足 1名 (5%) やや不満 0名 不満 0名

### (2) 参加者の声

- ・友達と仲良くできて満足することができた。
- ・レクや本キャンプでできなかったプログラムができてよかった。
- ・最後の野外炊事をみんなで楽しめてよかった。
- ・みんなで協力して今までで一番おいしいカレーをつくることができた。
- ・アドベンチャーラリーでは、グループのみんなで協力して課題をクリアすることができた。
- ・大変なこともあったけど、グループの団結力を最大限生かすことができた。
- ・取組発表では、キャンプで成長したことを発表できた。
- ・決意表明で発表したことを実行したいという気持ちになった。

### (3) 成果

- ①取組発表を行うことで、本キャンプの決意表明後、学校生活や家庭生活でどのようなことをがんばっているか、自身をふりかえる機会となった。
- ②本キャンプで実施できなかったプログラムを実施することができ、参加者の満足度も高かった。
- ③野外炊事では、参加者からも「今までで一番おいしいカレーをつくることができた。」  
「野菜がうまく切れた。」など、既習の技能を生かして調理することができたという感想が多いことから、身に付けた技能を発揮する場として効果的だった。

### (4) 課題

- ①事後キャンプを行う上で、参加者自身が成長を感じられるプログラム、キャンプをやり遂げたと実感できるような工夫をし、事後キャンプの趣旨に迫るような活動内容の設定が必要である。

担当：企画指導専門職 中山 太平

## 「地域探究プログラム オリエンテーション合宿 in 赤城」

### 1. 趣 旨

宿泊を伴うオリエンテーション合宿を通して、探究のプロセスを体験し、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを身に付ける。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期 日

令和5年8月7日（月）～8月9日（水）【2泊3日】

#### (2) 参加者

- ①参加対象 群馬県立沼田女子高等学校1、2学年生徒
- ②参加人数 1年生16名 2年生4名 計20名

### 3. 企画運営のポイント

- (1) 活動の目的や達成目標を明確にし、探究の学びのプロセスを用いて、指導計画とワークシートを作成した。
- (2) フィールドワーク先を多機能型事業所「SONATARUE」に設定することにより、医療法人大誠会グループの協力を得て、充実した体験活動ができるようにした。
- (3) オリエンテーション合宿の課題を「SONATARUE 活性化プランをつくる」に設定し、沼田女子高校の「総合的な探究の時間」の教育課程と関連させ、本合宿の成果を学校で活かすことができるようにした。

### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
8月7日 (月)	フィールドワーク① 「地域の魅力を発見」 講師：田辺 祐己 氏 (医療法人大誠会) 真下 潔 氏 (SONATARUE)	講義・演習① 「地域理解」	講義・演習② 「課題解決の基礎」
8月8日 (火)	フィールドワーク② 「地域課題の探究」 講師：田辺 祐己 氏 (医療法人大誠会)  講義・演習③ 「地域課題の探究」	講義・演習③ 「地域課題の探究」  発表①	ふりかえり
8月9日 (水)	講義・演習④ 「地域課題の探究」	発表②  ふりかえり  実践活動のためのガイダンス	

## 5. 主な活動内容



「フィールドワーク①『地域の魅力を発見』」



「フィールドワーク①『地域の魅力を発見』」



「講義・演習①『地域理解』」



「講義・演習②『課題解決の基礎』」



「フィールドワーク②『地域課題の探究』」



「発表」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足6名(32%) やや満足11名(58%) やや不満1名(5%) 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・フィールドワークをして、そこで学んだことを友達と共有したり、疑問に思ったことを話し合ったりすることで、より深く考えてまとめることができた。
- ・グループの全員が積極的に意見や疑問を発言し、それについてみんなで考え、新たな考えが生まれたのでとても面白かった。
- ・課題を考えることを難しいと感じていたが、身近なところに目を向けてみると、今まで当たり前と感じていたことに「なぜ」と疑問を持てるようになった。
- ・ひとつのことについて深く考える機会があまりないので、今回のような学習が苦手であることを実感した。

### (3) 成果

- ①参加者から「探究のプロセス(課題設定→情報収集→整理分析→まとめ表現)をどんどん繰り返していけば、よりよいアイデアが出るのがわかった。」「探究する物事についてまずは詳しく知り、そこから課題を考え、具体的で実現性が高い解決策を見出すことが大切だと思った。」などの意見があることから、探究のプロセスごとに活動の目的を明確にし、ワークシートを活用したことは、情報の整理や分析、アイデア出し、発表内容を考えるための手段として有効であった。
- ②参加者から「これからも地域を自ら探検して課題を見つけて解決案を考えたい。」などの意見があることから、地域についての理解を深める上でフィールドワークは有効であり、自分の地域に目を向けるきっかけとなった。

### (4) 課題

- ①アイデアをまとめる時間、発表資料作成の時間、合宿後の実践活動について考える時間を十分に確保することが難しかった。各プログラムの時間を延長する、終わっていない作業に取り組める時間をプログラムの中に設定することを検討する。また、夜の自由時間に作業が可能となるようにプログラム構成を工夫する。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥

## 2 社会の要請に応える体験活動等事業

### 「親子キャンプ 秋編」

#### 1. 趣 旨

親子でハイキング等の野外活動を通じて、自然体験の楽しさに触れるとともに、親子の交流を深める。さらに、読み聞かせを通じて、絵本の世界に触れ、豊かな心の育成を図る。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期 日

令和5年9月30日(土)～10月1日(日)【1泊2日】

##### (2) 参加者

- ①参加対象 幼児(4～6歳児※小学校入学前)とその保護者  
※兄弟姉妹がいる場合も参加可
- ②参加人数 48名(16家族)

#### 3. 企画運営のポイント

- (1) 運動遊びでは、「幼児期の遊びを中心とした運動プログラム」を取り入れることで、親子で遊びながら幼児期の基本的な動きが身に付くようにした。
- (2) 絵本専門士による絵本読み聞かせでは、子供の豊かな心の育成を図った。また、絵本の紹介や読み聞かせのコツを伝え、家庭での読み聞かせの参考となるようにした。
- (3) 「所外活動(赤城山ハイキング)」では、親子で一緒に赤城山の自然体験を楽しみながら、親子の交流を深める機会を設けた。雨天時(群馬県立ぐんま昆虫の森)は、自然の生き物と触れ合いながら、親子の交流を深める機会を設けた。

#### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
9月 30日 (土)		始まりの会 運動遊び 絵本読み聞かせ	たき火・星空観察(自由参加)
10月 1日 (日)	所外活動 晴天時 (赤城山ハイキング) 雨天時(実施) (群馬県立ぐんま昆虫の森散策)	終わりの会	

## 5. 主な活動内容



「運動遊び」



「絵本読み聞かせ」



「絵本読み聞かせ」



「焼き火」



「群馬県立ぐんま昆虫の森散策」



「群馬県立ぐんま昆虫の森散策」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足9家族（56%） やや満足7家族（44%） やや不満0家族 不満0家族

### (2) 参加者の声

- ・ボール投げなど、全身を使って遊べました。もっと遊びたいと言っていました。
- ・絵本をたくさん読んでいただき、子供が夢中になっていました。読み聞かせの参考になりました。
- ・焼きマシュマロがとてもおいしかったようで、次の日も話をしていました。たき火もあまり見せたことがなかったので、参加できてよかったです。
- ・昆虫が大好きだったので楽しく過ごせました。子供たちは満足そうでしたのでよかったです。

### (3) 成果

- ①運動遊びでは、元気いっぱい遊ぶ子供の姿や親子で楽しそうに遊ぶ姿が多く見られたことから、運動遊びの場の設定は体験活動の楽しさに触れるのに効果的であった。
- ②絵本専門士の読み聞かせに、子供たちは夢中になって聞き入っていた。保護者からも、読み聞かせの参考になったなどの感想が得られたことから、絵本専門士の活用は、子供たちの豊かな心を育むのに有効であった。
- ③親子でたき火を囲むプログラムは、親子の交流を深めるだけでなく、大人同士、子供同士の交流を生む時間につながった。

### (4) 課題

- ①本事業をチラシによって知った参加者が最も多く、ついでホームページであった。各媒体による広報も併せて、より計画的に広報活動を進める必要がある。
- ②天候によるプログラム変更があった。雨天時のプログラムとして、より趣旨にそった実施方法を検討する必要がある。

担当：企画指導専門職 平澤 輝樹

# 「親子キャンプ 新春編」

## 1. 趣 旨

日本における「書」を活用した活動を通して、日本の伝統と文化に触れ合いながら親子の交流を深める。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和6年1月6日（土）～1月7日（日）【1泊2日】

### (2) 参加者

- ①参加対象 小学3～4年生とその保護者 ※兄弟姉妹がいる場合も参加可
- ②参加人数 56名（18家族）

## 3. 企画運営のポイント

- (1)「書道パフォーマンス」では、書道部による書道パフォーマンスを見ることで、日本の伝統文化に触れることを目的とした。また、「書初めにチャレンジしてみよう」「書を楽しもう」では、小学生と保護者が体験することを通して、日本の伝統文の良さを体感できるよう工夫した。
- (2)「かまどで焼き餅をしよう」では、日本の伝統的行事の正月を体験できる活動を通して親子でふれあい、交流を深めることができるよう工夫した。

## 4. 日 程

	午 前	午 後
1月6日 (土)		開会式 書道パフォーマンス 書初めにチャレンジしよう (小学3～4年生) 書を楽しもう (保護者)
1月7日 (日)	朝のつどい かまどで焼き餅をしよう 閉会式	

## 5. 主な活動内容



「書道パフォーマンス①」



「書道パフォーマンス②」



「書初めにチャレンジしよう①」



「書初めにチャレンジしよう②」



「書を楽しもう」



「かまどで焼き餅をしよう」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足16家族(88%) やや満足2家族(12%) やや不満0家族 不満0家族

### (2) 参加者の声

- ・高校生の書道パフォーマンスを見ることができ、感動した。
- ・「書初めにチャレンジしよう」では、高校生が優しくアドバイスしてくれたので、上手に書けるようになった。
- ・「書を楽しもう」では、大人が夢中になることができた。講師の先生が書いているところや他の参加者の作品も見られてよかった。
- ・「かまどで焼き餅をしよう」では、火を使って餅を焼く機会がなかなかないので、楽しむことができた。
- ・普段はテレビやゲームをして過ごしているが、子供たちとゆっくりと過ごすことができた。

### (3) 成果

- ①「書道パフォーマンス」は、初めて見るという参加者がほとんどで、感動したという意見も多く、書道という日本の伝統文化をパフォーマンスという新たな形で見ると良い機会となった。
- ②「書初めにチャレンジしよう」では、参加者(小学校3～4年生)に高校生が支援し、アドバイスすることで参加者(小学校3～4年生)の満足度が高くなり、書に関する興味関心が高まった。
- ③保護者対象のプログラム「書を楽しもう」では、久しぶりに書に向き合うことができたなど肯定的な意見が多く、書に親しむ機会の提供につながった。

### (4) 課題

- ①親子の交流を深める時間として、2日目の「かまどで焼き餅をしよう」を中心としてプログラムデザインしたが、1日目の書に関するプログラムの活動内容の工夫や、夜のプログラムを導入するなどして、さらに親子の交流を深めるプログラムを設定する必要がある。

担当：企画指導専門職 中山 太平

# 「幼児教育指導者のための防災研修会」

## 1. 趣 旨

前橋市国土強靱化地域計画の重点化施策の一つである「防災啓発・防災教育の推進」を目指し、保育現場における防災啓発及び防災教育を幼稚園を中心とした園児及び幼稚園教諭に対し実施しその充実を図る。また、実施にあたっては、BCP（災害時に重要業務が中断しないこと）を考慮する。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和6年1月19日（金）～1月20日（土）【1泊2日】

### (2) 参加者

- ①参加対象 幼稚園教諭・保育士等
- ②参加人数 9名（宿泊2名、日帰り7名）

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 実施にあたっては、一般募集の他、一般社団法人群馬県私立幼稚園・認定こども園協会と連携・協力する。特に、参加者募集については、協会を通じて実施した。
- (2) 事業の企画段階から、防災の専門家である群馬大学大学院の金井昌信教授と内容の検討を行い、BCPを考慮した内容とした。

## 4. 日 程

	午 前	午 後
1月19日 (金)		開会式 幼児教育プログラム紹介・施設見学情報交換
1月20日 (土)	朝のつどい 開会式 防災研修1 講師：群馬大学大学院教授 金井昌信 氏	防災研修2 講師：群馬大学大学院教授 金井昌信 氏 閉会式

## 5. 主な活動内容



「幼児教育プログラム紹介・施設見学」



「防災研修会①」



「防災研修会②」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 7人 (78%) やや満足 2人 (22%) やや不満 0人 不満 0人

### (2) 参加者の声

- ・新しい気づきがあった。
- ・中途半端な意識でなく、職員全員で防災に向き合わないと、どうにもならないことが分かった。
- ・避難する場所によって、必要なものが変わってくるのでしっかりと考えておこうと思う。
- ・当たり前を違う視点から捉えて防災について考え直すきっかけとなった。他の職員とも共有していきたい。
- ・2年越しの参加だったが、BCP（事業継続計画）からBCM（事業継続マネジメント）の流れを汲み取ることができ有意義であった。
- ・未満児（0～2歳児）の園に勤務している。避難となると、職員の手が多く必要になる。避難や保護者が迎えに来ない場合の対策を考えると、そこからの話し合いが進まない。改めてBCMを行い、子供たちの命を安全に守ることができる防災を考えていきたい。

### (3) 成果

- ①幼児教育プログラムの紹介・施設見学では、「宿泊することで、施設の使い方を知ることができた。」という感想から、参加者のニーズに応じた、きめ細やかな説明ができていたと考える。
- ②防災研修では、「新たな気づきがあった。」「当たり前を違う視点から捉えて防災について考え直すきっかけとなった。」という感想から、災害時における各園の安全管理や職員の役割分担に新たな視点を加えることができたと考える。

### (4) 課題

- ①参加者の満足度が高い研修会ではあるが、応募人数が定員に達していない。募集の仕方や範囲、事業の在り方を再考する必要がある。
- ②1月の開催は、積雪による交通障害や感染症拡大が想定されるため、夏季又は秋季の開催を検討する必要がある。

担当：企画指導専門職 小林 大輔

# 「あかぎ防災キャンプ」

## 1. 趣 旨

次代を担う人材の防災意識と社会参画意識の向上を目指し、これからの防災・減災の担い手である児童生徒を中心とした防災キャンプを開催し、防災ジュニアリーダーを育成することを目的とする。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和6年1月27日（土）～1月28日（日）【1泊2日】

### (2) 参加者

①参加対象 小学5・6年生、中学生、高校生

②参加人数 小学5年生1名 小学6年生1名 中学1年生2名 計4名

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 「あかぎ防災キャンプ」の目標を「防災・減災の担い手となる防災ジュニアリーダーの育成」に設定し、本事業での学びを学校や地域社会で活用できるようにした。
- (2) 群馬大学金井昌信教授に指導助言をいただき、昨年度までの防災キャンプで実施したプログラムを見直し、より効果的なプログラムを実施できるようにした。
- (3) 前橋市総務部防災危機管理課、前橋市消防局北消防署の協力のもと、児童生徒が意欲的に取り組むことができる充実した体験活動を実施した。

## 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
1月27日 (土)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・起震車体験 講師：前橋市総務部防災危機管理課</li> <li>・避難所設営についての講話 講師：群馬大学大学院 金井昌信教授</li> <li>・避難所設営体験 講師：群馬大学大学院 金井昌信教授</li> <li>・避難所体験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災食体験</li> <li>・入浴できない際の対処方法体験</li> </ul>
1月28日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・風水害プログラム 講師：前橋市消防局北消防署 石原宏二白川分署長</li> <li>・非常持出品について</li> <li>・振り返り</li> </ul>		

## 5. 主な活動内容



「起震車体験」



「避難所設営のための講話」



「避難所設営体験」



「防災食体験」



「風水害プログラム」



「非常持出品について」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足4名(100%) やや満足0名 やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・起震車だから怖くはなかったが、実際に地震が起きたら絶対に動けないと思った。
- ・避難所について知識を深めることができた。「防災対策って深いな。」と思った。家族と知識を共有したい。
- ・避難所設営体験では、電気がないから寒いし、避難所を設営するのが大変だとわかった。協力が大切だと感じた。
- ・防災食体験では、数がないと譲ったり分けたりしないといけないことがわかった。普段飲んでいる水のありがたさがわかった。
- ・家の防災グッズを見直したいと思った。「必要なものがたくさんあるな。」と思った。どうやって持っていくかなど、決めなくてはならないことがたくさんあることがわかった。

### (3) 成果

- ①参加者の感想から、防災ジュニアリーダーとしての知識や意識の高まりを感じることができた。
- ②関係機関と連携することで、起震車体験や風水害プログラムなど充実した体験活動を提供することができた。
- ③振り返りの時間が、個人の学びを学校や地域社会で活用するための動機づけの時間となっていた。

### (4) 課題

- ①より多くの児童生徒に参加してもらうために、開催時期や期間、広報の仕方などを工夫する必要がある。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥

### 3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

## 「あかぎつつじキャンプ①」

### ～児童養護施設対象事業～

#### 1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家において、児童養護施設の子供たちを対象に、自然活動等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。また、子供たち同士のふれあいを深めたり、子供たちと児童養護施設外の方との交流を図ったりしながら、自然体験や食育、工作体験などを行い、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期 日

令和5年6月10日(土)～6月11日(日)【1泊2日】

##### (2) 参加者

- ①参加対象 児童養護施設「こはるび」の児童生徒
- ②参加人数 26名
- ③参加者の内訳 小学生14名、中学生4名、引率職員8名

#### 3. 企画運営のポイント

- (1)「赤城山登山」では、個々の体力に応じて登山コースを選択できるようにした。
- (2)自主的な活動を促すため、児童養護施設「こはるび」の児童生徒が考えたレクリエーションを楽しむ時間「こはるびタイム」を設定した。
- (3)「自立」「心身の健康増進」が事業の目的であることをスタッフ全員で共通理解した上で、「どのように関わるべきか」を意識しながら事業の運営を進めた。

#### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
6月10日 (土)	赤城山登山	赤城山登山 開会式 夕べのつどい	館内フォトラリー
6月11日 (日)	朝のつどい かんな箸づくり こはるびタイム	閉会式	

## 5. 主な活動内容

「赤城山登山（地藏岳）」

「赤城山登山（長七郎山）」

「開会式」

「かなな箸づくり」

「こはるびタイム」

「閉会式」

## 6. 成果と課題

### （1）参加者アンケート結果

満足 24名（92%） やや満足 2名（8%） やや不満 0人 不満 0人

### （2）参加者の声

#### 【児童生徒】

- ・「赤城山登山」で、石があるところで、みんなが声かけをしてくれたから安心して登ることができた。
- ・「かなな箸づくり」で、誰かが困っている時に手伝うことが、絆づくりにつながった。

#### 【引率職員】

- ・「赤城山登山」では、励まし合う姿が微笑ましく、大変そうにしていた子供も最後までがんばることができた。
- ・日常で使う箸を作成し、その大変さや物の大切さを学んでくれた。また、児童生徒同士の教え合いや片付けなど大切なことを学べた。

### （3）成果

- ①子供たちから「かなな箸づくりで、誰かが困っている時に手伝うことが、絆づくりにつながった。」などの感想があることから、子供同士のふれあいを深めるプログラムを実施できたと考える。
- ②引率職員から「子供たちが危険な道具を扱うにあたって、引率職員や当所職員の指示を聞いてから活動をしていたので、生活習慣向上に役立つと思った。」などの感想があることから、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけるプログラムを実施できたと考える。

### （4）課題

- ①子供たちに次回のキャンプで実施したいことを尋ねたところ「ドッジボール」や「鬼ごっこ」など当所でなくてもできるものが多かった。事前に当所ならではの自然を生かしたプログラムや貸出備品等を周知することで、「こはるびタイム」におけるレクリエーションの選択肢を多く持たせたい。

担当：企画指導専門職 小林 大輔

# 「あかぎつつじキャンプ②」

## ～児童養護施設対象事業～

### 1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家において、児童養護施設の子供たちを対象に、自然活動等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。また、子供たち同士のふれあいを深めたり、子供たちと児童養護施設外の方との交流を図ったりしながら、自然体験や食育、工作体験などを行い、心身の健康増進や子供たちの健全育成を図る。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期 日

令和5年11月18日（土）～11月19日（日）

#### (2) 参加者

- ①参加対象 児童養護施設「こはるび」の児童生徒
- ②参加人数 25名
- ③参加者の内訳 小学生15名、中学生4名、引率職員6名

### 3. 企画運営のポイント

- (1) 「スーパー竹とんぼづくり」では、子供たちが協働しやすいように、ペアで制作するようにした。
- (2) 自主的な活動を促すため、児童養護施設「こはるび」の子供たちが考えたレクリエーションを楽しむ時間「こはるびタイム」「こはるびキャンプファイヤー」を設定した。
- (3) 「自立」「心身の健康増進」が事業の目的であることを当施設のスタッフ全員で共通理解した上で、「どのように関わるべきか」を意識しながら事業の運営を進めた。

### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
11月18日 (土)	はじまりの会 アイスブレイク	「スーパー竹とんぼづくり」 「こはるびタイム」 タベのつどい	「こはるびキャンドル ファイヤー」 (雨天のため)
11月19日 (日)	朝のつどい 野外炊事 (BBQ、焼き芋)	お別れの会	

## 5. 主な活動内容

「アイスブレイク」

「スーパー竹とんぼづくり」

「こはるびタイム」

「キャンドルファイヤー」

「野外炊事（BBQ）」

「野外炊事（焼き芋）」

## 6. 成果と課題

### （1）参加者アンケート結果

満足 23名（92%） やや満足 1名（4%） やや不満 1名（4%） 不満 0名

### （2）参加者の声

#### 【児童生徒】

- ・たくさんやってみみたいことがあったので参加できてよかった。経験したことがないことを経験することができてうれしかった。
- ・まだまだやってみみたいことがあったので参加できてよかった。経験したことがないことを経験することができてうれしかった。

#### 【引率職員】

- ・子供たちが国立赤城に来ることをとても楽しみにしており、施設では見ることはできない面を多く見るすることができた。とてもよい経験・機会になったことを感謝している。
- ・班別の活動が多く、あまりかわりがない子と関わることで、普段見ることがない姿を見ることができた。

### （3）成果

- ①子供たちから「小さい子に教えながら作ることができ、距離が縮まったことがよかった。」などの感想があることから、子供同士のふれあいを深めるプログラムを実施できたと考える。
- ②引率職員から「料理が、食材を切って炒めたら終わりではないということが分かる機会だった。準備・調理・実食・片付けと料理のプロセスが分かった。大変だったからこそおいしかったということも分かったと思う。」などの感想があることから、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけるプログラムを実施できたと考える。

### （4）課題

- ①幅広い年齢層の子供たちが関わり合いながら楽しむことができるプログラムを設定するため、子供たちの実態を把握している施設職員と連携しながら、活動内容を決めていく必要がある。

担当：企画指導専門職 平澤 輝樹

# 「あかぎオータムキャンプ」

## ～ひとり親家庭対象事業～

### 1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家において、ひとり親家庭の子供たちを対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。自然体験や食育、工作体験などの活動をする中で、子供たち同士のふれあいを深めたり、保護者同士の交流を図ったりする活動を通して、心身の健康増進や子供たちの健全育成を図る。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期 日

令和5年9月23日(土)～9月24日(日)【1泊2日】

#### (2) 参加者

- ①参加対象 沼田市内在住のひとり親家庭の子供(18歳まで)と保護者
- ②参加人数 15名
- ③参加者の内訳 小学生7名、保護者6名、引率職員2名

### 3. 企画運営のポイント

- (1) 基本的な生活習慣の確立や心身の健康増進を意識し、体験活動を中心に据えたプログラムを構成した。
- (2) 子供たちの「野外炊事(防災カレーライス作り)」と同じ時間に、保護者の「ワクワク子育てトーク(群馬県生涯学習センター 社会教育主事 富澤渉氏)」を設定することで、母子分離の機会とした。
- (3) 「自立」「心身の健康増進」が事業の目的であることをスタッフ全員で共通理解した上で、「どのように関わるべきか」を意識しながら事業の運営を進めた。

### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
9月23日 (土)		開会式 (子) 野外炊事「防災ご 飯でカレーライス づくり」 (親) ワクワク子育てト ーク 講師：富澤 渉 氏 群馬県生涯学習 センター 社会教育主事	たき火 入浴 就寝
9月24日 (日)	朝のつどい 段ボールベッドで秘密 基地作り かんな箸づくり	閉会式	

## 5. 主な活動内容

「防災ご飯でカレーライスづくり」 「ワクワク子育てトークン」

「たき火」

「段ボールベッドで秘密基地作り」

「テント設営」

「かんな箸づくり」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足14名(93%) やや満足1名(7%) やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

#### 【子供】

- ・たき火でマシュマロを焼いて食べることが初めてで楽しかった。
- ・クラフトを作ることが楽しかった。子供同士でおしゃべりすることが楽しかった。

#### 【保護者】

- ・野外炊事、たき火、テント設営などを家庭で行うには大変なので、このような機会があればまた利用してみたい。
- ・「段ボールベッド」「かんな箸」作りでは、ファミリーごとに体験することができ、ふれあいを深めることができた。

### (3) 成果

- ①子供たちから「たき火でマシュマロを焼いて食べることが初めてで楽しかった。」「おしゃべりすることが楽しかった。」などの感想があることから、子供同士のふれあいを深めるプログラムを実施できたと考える。
- ②保護者から「初めての体験ができ、その中でできなかったことができるようになり、知らなかったことを知ることができ、成長が見られた。」などの感想があることから、子供の基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけるプログラムを実施できたと考える。

### (4) 課題

- ①プログラムが順調に進み、空き時間が生じた。少しの空き時間で、子供のみやファミリーでできるプログラムを予め用意しておく必要があった。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥

## 4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

### 「ボランティア養成セミナー」

#### 1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家の自然環境を活かした様々な体験活動や学習を通して、青少年教育施設における子供たちの体験活動を支えるボランティアとしての必要な知識・技術について研修する。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期 日

令和5年5月27日(土)～5月28日(日)【1泊2日】

##### (2) 参加者

- ①参加対象 高校生以上
- ②参加人数 27名(応募34名 キャンセル7名)
- ③参加者の内訳 高校生17名、大学生8名、社会人2名、その他(職員1名)

#### 3. 企画運営のポイント

- (1) ボランティア活動を行う上で、必要な知識や技能を座学だけではなく、体験を通して学べるように計画した。
- (2) 法人ボランティアとして活動してきた先輩ボランティアが、自らの体験談を発表したり、プログラムの一部を担ったりすることで、ボランティア活動について具体的なイメージを持たせるとともに、より身近なものとしてとらえられるようにした。

#### 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
5月27日 (土)	開会行事 演習「ボランティア活動 の技術」 講師：当所職員 中谷 仁 講義「青少年教育」 講師：文教大学 准教授 青山 鉄兵 氏	講義「ボランティア活動 の意義」 講師：文教大学 准教授 青山 鉄兵 氏 演習「ボランティア活動 の技術」 講師：当所職員 中山 太平	説明「青少年教育施設に おけるボランテ ィア活動」 講師：法人ボランティア 長岡 一太 根岸 月叶 根岸 咲代子
5月28日 (日)	講義「救命救急法」 講師：前橋市消防局北消 防署 署員 講義「青少年教育施設の 現状と運営」 講師：当所職員 次長 齊藤 裕徳	説明「法人ボランティア 登録制度」 講師：当所職員 杉山 直弥 閉会行事	

## 5. 主な活動内容



「ボランティア活動の技術」



「ボランティア活動の意義」



「ボランティア活動の技術」



「青少年教育施設のボランティア活動」



「救命救急法」



「青少年教育施設の現状と課題」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 26名 (96%) やや満足 1名 (4%) やや不満 0名 不満 0名

### (2) 参加者の声

- ・実践的な講義や実習が多く、すぐにボランティア活動に活かせそうと思った。
- ・アイスブレイクの活動を通じて、初対面の人達とも仲良くなれた。
- ・ボランティアへの興味が高まった。
- ・野外炊事やアイスブレイクでは参加者、指導者の立場が学べてよかった。講義もすごくよかった。
- ・友人でも先生でもない私達のナナメの関係が子供たちにとってとても大事だということがわかった。
- ・法人ボランティアがどのような活動をしているのか、また国立赤城がどのような事業を行っているのかを知ることができ、今後参加する具体的なイメージが持てた。
- ・これからボランティア活動をやっていこうと思えた。

### (3) 成果

- ①ボランティア活動に対して関心が高い参加者が多く、各種プログラムに熱心に取り組んでもらえた。また、アイスブレイクや野外炊事では参加者自身が楽しみながら交流することで、活動の意義や成果を実感することができた。

### (4) 課題

- ①高校生の参加者が多かったが、高校生と大学生の活躍の場の違い、その違いを踏まえて身に付けてほしいことは何かといったことを今後検討する必要がある。
- ②参加者の立場とスタッフの立場は異なること、今後はスタッフの立場として事業に参加するのだということを伝える場面が不足していた。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥  
事業推進係主任 中谷 仁

# 「自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成事業」

## 1. 趣 旨

ボランティア養成セミナーの受講者向けのスキルアップ講習として、楽しく安全に活動を指導するための自然体験活動指導者（NEALリーダー）を養成する。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和5年6月24日（土）～6月25日（日）【1泊2日】

### (2) 参加者

- ①参加対象 ボランティア養成セミナー受講者
- ②参加人数 19名（申込26名、キャンセル7名）
- ③参加者の内訳 高校生6名、大学生8名、社会人5名（職員1名）
- ④修了者数 19名

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 参加者の確保を図るため、ボランティア活動や自然体験活動への活動意欲に溢れているボランティア養成セミナー直後に開催した。
- (2) ボランティア養成セミナーからのスキルアップという位置づけで、指導者として必要な知識や技能を座学だけではなく、実践を通して学べるようにプログラムデザインをした。
- (3) 主体的な学びの場を提供するために、講義・演習において参加者同士の交流を深める仕掛けや、相互学習する時間を意図的に設けた。

## 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
6月24日 (土)	開講式 説明「NEAL制度ガイド ンス」 講師：国立妙高青少年 自然の家 次長 桑山宗大 氏 実技「自然体験活動の 技術」 講師：国立妙高青少年自 然の家 次長 桑山宗大 氏	講義「対象者理解」 講師：群馬大学 准教授 大島みずき氏 講義「自然体験活動の指 導」 講師：大東文化大学 教授 中村正雄 氏	実技「自然体験活動の技 術」 講師：キープ協会 佐藤陽介 氏
6月25日 (日)	講義「自然体験活動 の特質」 講師：キープ協会 佐藤陽介 氏	説明「NEAL制度ガイダ ンス」 講師：国立妙高青少年自 然の家 次長 桑山宗大 氏 認定試験 閉講式	

## 5. 主な活動内容



「ガイダンス」



「自然体験活動の技術」



「対象者理解」



「自然体験活動の指導」



「自然体験活動の技術」



「自然体験活動の特質」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

事業全体：満足18名（95%） やや満足1名（5%） やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・「自然体験活動指導者（NEALリーダー）」として持つべき意識（身だしなみ、雰囲気、立ち位置）などを忘れずに、子供たちに自然を好きになってもらえるような活動に取り組みたい。」
- ・「子供たちに、自然の中で「気づく楽しさ」を感じてもらうため、指導者としてどんな視点を持つべきなのかを学べたので、今後の活動の中で実践したい。」

### (3) 成果

- ①意識の高い参加者が多い傾向であることが事前に把握できていたため、各講師へ質問を受ける機会を確保できるよう協力いただいた。結果、受講者からの数多くの質問があり、主体的な学びの場を提供することができた。
- ②専門家を各講義の講師として招聘することにより、専門家ならではの視点や経験を踏まえた講義・演習を実施することができた。専門家による講義内容は、参加者からのアンケート結果の評価が高く、受講者の知識習熟に良い影響を与えたといえる。

### (4) 課題

- ①参加者より、講義時間が伸びたことに対し残念である旨の意見があった。長時間の講義であることから、初日の開始時間を見直すなど参加者への負担軽減を検討する必要がある。
- ②今後も、NEAL事業については専門性の高い講師陣を迎える必要がある。今回も参加者から高い満足度を得ることができたが、従来の講師に固執することなく、講師候補者のリストアップを行い、質の高い事業実施に努める必要がある。
- ③実施日が高校生のテスト期間であることからボランティアセミナー受講者のうち、6名が参加を辞退したため、開催時期の検討が必要である。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥  
事業推進係主任 中谷 仁

# 「第1回利用団体のための研修会」

## 1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家を利用する団体の引率者が、施設の利用方法や各活動プログラムの内容を理解するとともに、実際にプログラムの一部を体験する。

## 2. 事業の概要

### (1) 期 日

令和5年5月9日（火）、5月10日（水）

### (2) 参加者

- ①参加対象 令和5年度利用団体、利用の仕方の説明を希望する各団体の引率者  
Aコース：6月 5日～8月31日ご利用の団体  
Bコース：5月11日～8月31日ご利用の団体
- ②参加人数 5月 9日（火）Aコース（応募 6団体 7名）  
Bコース（応募11団体12名）  
5月10日（水）Aコース（応募 5団体 6名）  
Bコース（応募 6団体 6名）
- ③参加者の内訳 小学校教諭20名、中学校教諭9名、社会教育団体指導者2名

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 施設説明を主としたAコースと体験を主としたBコースを利用期間に応じて選択できるように計画した。
- (2) 両コースともにゆとりある時間配分にして、参加者からの質問を受けやすい体制を整えた。
- (3) 開催日を平日に設定し、学校職員が出張で参加できるようにした。

## 4. 日 程

	午 前	午 後
Aコース	開会行事 施設利用説明 施設見学	施設見学 個別打ち合わせ アンケート記入
Bコース	開会行事 野外炊事「カレーライスづくり」	野外炊事「カレーライスづくり」 アドベンチャーラリー アンケート記入

## 5. 主な活動内容



「開会式」



「施設利用説明」



「施設見学（館内）」



「施設見学（館外）」



「野外炊事体験（カレーライスづくり）」



「アドベンチャーラリー体験」

## 6. 成果と課題

### （1）参加者アンケート結果

満足 28名（90%） やや満足 3名（10%） やや不満 0名 不満 0名

### （2）参加者の声

- ・計画立案にあたって、企画指導専門職の経験談を聞いたので参考になった。
- ・教師側の考えを理解している方が多く、活用しやすい研修だと思った。
- ・活動計画について詳しく説明してくれて、プログラムの内容や時間がはっきりとしてよかった。
- ・カレー作りの道具や食材の内容、場所、手順が分かり、本番へのイメージができた。調理器具の洗い方のポイントが分かり、生徒に具体的な指示が出せると思った。
- ・傾斜がきついところもあり、地図だけでは分からないところが歩いてみて分かった。

### （3）成果

- ①「打ち合わせが丁寧で助かった。（Aコース）」「野外炊事を実際に体験して、道具などの場所や片付け方が分かった。（Bコース）」等の感想が多いことから、研修コースを選択制にしたことで参加者のニーズに応じたものになったといえる。
- ②「作業の合間に質問に答えてもらうことができありがたかった。」「野外炊事以外の質問にも答えてもらえた。」等の感想から、参加者にとってゆとりのあるプログラムであり、本番の引率を想定し研修を行えたと考える。
- ③80%以上の参加者が、アンケートで、「平日開催のほうがよい。」と回答していたことから参加者のニーズに応じた設定であったと考える。
- ④平日開催にしたため学校利用団体の人数が1団体1～2名で少数となった。そのため、研修の質が高く、参加者の満足度が高いものとなった。

### （4）課題

- ①より充実した研修とするために、応募人数に応じて研修のスケジュールの組み直しをしたり、募集段階で1団体からの参加人数に制限をかけたりする必要がある。

担当：企画指導専門職 小林 大輔

## 「第2回利用団体のための研修会」

### 1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家を利用する団体の引率者が、施設の利用方法や各活動プログラムの内容を理解するとともに、実際にプログラムの一部を体験する。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期 日

令和5年8月24日（木）

#### (2) 参加者

- ①参加対象 令和5年度利用団体、利用方法の説明を希望する各団体の引率者  
Aコース：10月2日（月）以降ご利用の団体  
Bコース：9月1日（金）以降ご利用の団体
- ②参加人数 Aコース（応募 4団体 6名）  
Bコース（応募 3団体 4名）
- ③参加者の内訳 小学校教諭9名、社会教育団体指導者1名

### 3. 企画運営のポイント

- (1) 施設説明を主としたAコースと体験を主としたBコースを団体指導者のニーズに応じて選択できるように計画した。
- (2) 両コースともにゆとりある時間配分にして、参加者からの質問を受けやすい体制を整えた。
- (3) 開催日を夏季休業中の平日に設定し、学校職員が出張で参加できるようにした。

### 4. 日 程

	午 前	午 後
Aコース	開会行事 施設利用説明 施設見学	施設見学 個別打ち合わせ アンケート記入
Bコース	開会行事 野外炊事「カレーライスづくり」	野外炊事「カレーライスづくり」 館内フォトラリー アンケート記入

## 5. 主な活動内容



「開会式」



「施設利用説明」



「施設見学（館内）」



「施設見学（館外）」



「野外炊事体験（カレーライスづくり）」



「館内フォトラリー体験」

## 6. 成果と課題

### （1）参加者アンケート結果

満足8名（80%） やや満足2名（20%） やや不満0名 不満0名

### （2）参加者の声

- ・具体的な場面を想定して説明していたので分かりやすかった。
- ・施設が広いので迷子にならないように同校職員と共有したい。
- ・キャンプファイヤーや野外炊事の場所や道具を実際に見ることができたので、当日の動きを少しイメージすることができた。
- ・クラフト系プログラムで何を作らせるか迷っていたが、実際に体験してイメージできた。
- ・実際に見学・体験ができることと、その都度質問に応じていただけることがとても参考になった。利用している団体の様子を見ることができたのもよかった。
- ・事前打ち合わせがじっくりできたことがよかった
- ・カレーライスを実際に作ってみて、危険な部分・準備するもの・事前指導の内容を考えるための参考になった。

### （3）成果

- ①「実際に見学・体験ができることと、その都度質問に応じていただけることがとても参考になった。利用している団体の様子を見ることができたのもよかった。（Aコース）」  
「カレーライスを実際に作ってみて、危険な部分・準備するもの・事前指導の内容を考えるための参考になった。（Bコース）」等の感想が多いことから、研修コースを選択制にしたことで参加者のニーズに応じたものになったといえる。
- ②参加団体の活動計画書を事前に把握することで、施設見学時に当日の動きを想定した具体的な助言をすることができた。また、当日実施するプログラムに変更するなど柔軟な対応をすることができた。

### （4）課題

- ①夏季休業中であったが、学校団体の参加数があまり多くなかった。本研修会に参加した団体の指導者は、実際の利用で見通しをもって指導することができた。次年度は、多くの団体に参加してもらえるよう定期的な開催も含め検討する。

担当：企画指導専門職 小林 大輔

## 5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業(交流の家実施主体事業)

### 「群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動推進事業」

#### 1. 趣 旨

群馬県における青少年の体験活動を推進するとともに、「体験の風をおこそう」運動を広く普及することを目的として、群馬県教育委員会及び学校教育関係者並びに青少年団体による実行委員会を組織し、実行委員の団体及び関係する団体と連携しながら体験活動の場を提供する。

#### 2. 事業の概要（期日と参加者数）

（3月1日現在）

	参加事業名	期日	参加人数	場所
1	AKAGI PIG-OUT CAMP	5/27	1,182	みやぎ千本桜の森公園
2	富士見地区のびゆくこどものつどい・ふれあいの広場	5/28	228	富士見公民館
3	令和5年度アウトドアゲーム体験会	7/23	100	観音寺ファミリーパーク
4	ぐんだいで遊ぼう！	8/6	100	群馬大学理工学部
5	前橋市生涯学習フェスティバル 2023	9/2	79	前橋プラザ元気 21
6	子どもゆめ基金助成事業説明会	9/4	16	前橋プラザ元気 21
7	あかぎ・de・マルシェ Halloween Event	10/28	562	道の駅まえばし赤城
8	群馬県民の日特別イベント	10/29	281	群馬県生涯学習センター
9	富士見産業祭	11/3	353	富士見公民館
10	赤城南面クラフトフェア	11/4 11/5	566 818	道の駅 ぐりーんふらわー牧場
11	第12回 まちの先生見本市	11/12	491	太田市新田文化会館
12	秋アウトドアゲーム体験会	11/25	256	ぐんまこどもの国
13	メリークリスマスワークショップ	12/17	281	道の駅まえばし赤城
14	冬休みワークショップ	12/27	204	道の駅まえばし赤城
15	子ども体験ワークショップ in スマーク伊勢崎	2/3 2/18	382 544	スマーク伊勢崎
16	道の駅まえばし赤城 1周年感謝祭	3/23	—	道の駅まえばし赤城
	合 計		5,899	

#### 3. 企画運営のポイント

- (1) 様々な年代とより多くの青少年に対して、体験活動の機会と場の提供ができるよう多くのイベントに参加し、缶バッチづくり体験を提供した。

#### 4. 事業の様子



「ぐんだいで遊ぼう！」



「前橋市生涯学習フェスティバル2023」



「あかぎ・de・マルシェ」



「冬休みワークショップ」



「子ども体験ワークショップ」



「子ども体験ワークショップ」

#### 5. 成果と課題

##### (1) 成果

- ①新たな連携先として道の駅まえばし赤城に体験ブースの出展を行うことで、たくさんの方々に体験の場を提供および「体験の風をおこそう」運動の普及・啓発を図ることができた。

##### (2) 課題

- ①地域への体験活動の普及については、多数の出展を行う中で達成できつつあるが、実行委員会の構成団体同士が連携した取り組みをさらに推進させる必要がある。さらに実行委員が「体験の風をおこそう運動」を主体的に取り組めるような体制を整える必要がある。

担当 事業推進係主任 中谷 仁

# 「あかぎフェスタ2023」

## 1. 趣 旨

「体験の風をおこそう」運動を広く普及することを目的に実施する。  
また、小学生・幼児等の親子を対象に子供たちの成長に様々な体験活動が大切であることと基本的な生活習慣の重要性について発信する機会とする。

## 2. 事業の概要

(1) 期 日 令和5年10月21日(土)～10月22日(日)【1泊2日】  
令和5年10月22日(日)【日帰り】

### (2) 参加者

- ①参加対象 「体験活動」に興味のある親子  
②参加人数 宿泊175名(51家族) 日帰り369名(107家族)  
③参加者内訳 宿泊 保護者75名、中学生3名、小学生61名、幼児28名、  
3歳未満児8名  
日帰り 保護者168名、高校生1名、中学生10名、  
小学生146名、幼児34名、3歳未満児10名

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 群馬県から「体験の風をおこそう」運動実行委員会構成団体と連携して企画・実施する教育事業として位置づけた。  
(2) より多くの方に体験活動を提供できるようメイン会場を多目的フィールドとした。  
(3) 「体験の風をおこそう」運動応援団の池谷直樹氏を招聘し、体操パフォーマンスや体操教室を実施した。  
(4) 家族、特に子供たちに、多様な遊び、体験の機会と場を提供するとともに、体操教室参加の家族には、前夜祭と称し家族でゆっくりと楽しい時間を過ごせるよう1泊2日の宿泊を伴う事業とした。  
(5) 法人ボランティアが、これまで培った知識・技能・経験を活かして、参加者が楽しめるように自主企画し運営するブースを設け、より実践的な力を養う機会とした。

## 4. 日 程

	午 前	午 後	夜
10月 21日 (土)		オリエンテーション 体操教室 (幼児～低学年の部) 体操教室 (低学年～高学年) 夕べのつどい	夜のプログラム 晴天：たき火 雨天：館内フォトラリー 入浴 就寝
10月 22日 (日)	朝のつどい 朝食 オープニング 体験活動ブース (18出展) キッチンカー (6台)	昼食 市立前橋高校吹奏楽部 特別演奏会 体操パフォーマンス クロージング	

## 5. 主な活動内容



「体操教室」



「タベのつどい」



「法人ボランティア自主企画」



「体験ブース」



「市立前橋高校吹奏楽部特別演奏会」



「体操パフォーマンス」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 35家族(76%) やや満足11家族(24%) やや不満0家族 不満0家族

### (2) 参加者の声

- ・ 広々としたところでのびのびと過ごすことができた。
- ・ 初めての体験が多くてわくわくした。
- ・ 日常とは違う体験を味わうことができた。
- ・ 本事業に関わっているすべての方が素敵で、居心地がよかった。心から楽しむことができた。
- ・ 小さい子供が参加できる安全なイベントがあるのは、うれしい。
- ・ 学べて楽しいイベントを今後も期待している。

### (3) 成果

- ①群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動実行委員会の構成団体13団体に加え、群馬県立勢多農林高等学校や前橋市立前橋高等学校など様々な団体と連携して取り組むことができた。
- ②多目的フィールドをメイン会場とするとともに、つどいの広場を駐車場としたことにより、前年度の3倍近い来場者に体験活動を提供することができた。
- ③タベのつどいでの読み聞かせや、朝のつどいでのラジオ体操などをおして、基本的な生活習慣の重要性について発信することができた。

### (4) 課題

- ①宿泊者の1日目の日程にあまり余裕がなかったため、日程の見直しを行う必要がある。
- ②体験活動のメイン会場とステージ発表の会場が異なったため、会場移動に時間を要した。スムーズな参加者誘導ができるよう、日程や会場を工夫する必要がある。
- ③メイン会場、ステージ発表会場、駐車場と会場が広範囲になってしまったため、参加者にも運営するスタッフにも負担がかかった。入場者数を確保しながらもコンパクトな運営をできる方法を検討する必要がある。

担当 主任企画指導専門職 竹内 正則  
事業推進係主任 中谷 仁

# 「さくらフェスタ」

## 1. 趣 旨

富士見地区をはじめ前橋市及び周辺地域の人々に施設を開放し、交流の家の年度のスタートを知らせる。体験活動の意義や重要性を深めるために、施設内で咲いている桜の観賞や体験活動を提供する。

## 2. 事業の概要

- (1) 期 日 令和5年4月5日(水)～4月8日(金)  
(2) 参加者 ①参加対象 富士見地区をはじめとする前橋市及び周辺地域の住民  
②参加人数 129名

## 3. 企画運営のポイント

- (1) 地域住民の方に広く周知できるよう、メディアや地域の回覧板等を活用した。  
(2) 体験活動の意義や重要性を伝えることができるよう、桜を鑑賞しながらのスタンプラリーや自然の中での特別演奏会を企画した。  
(3) 安心・安全なプログラム運営ができるよう、実施前や実施期間中に落ち枝等の点検を行った。

## 4. 日 程

	内容
4月5日(水)～4月7日(金)	スタンプラリー
4月8日(日)	クロージングセレモニー 市立前橋高校吹奏楽部特別演奏会 ササビーとのふれあいタイム スタンプラリー

## 5. 事業の様子



「受付」



「市立前橋高校吹奏楽部特別演奏会」



「ササビーとの記念撮影」

## 6. 成果と課題

### (1) 成 果

- ① イベント日には、想定を超える集客があった。
- ② 子供から大人まで、スタンプラリーや演奏会を楽しんでいた。
- ③ 事業実施前や、実施中の点検により事故やケガ等がなかった。
- ④ 法人ボランティアの協力により、来場者の受付、スタンプラリーや演奏会の運営が円滑に進められた。

### (2) 課 題

- ① 前橋市富士見地区の回覧板を活用したが、一部回覧されるのが遅い地域があったので、可能な限り早い時期に広報を始める必要がある。
- ② イベント日が、荒天だったため特別演奏会が室内での実施となった。荒天時だった場合にも桜を感じてもらえるような工夫が必要である。

担当 企画指導専門職 杉山 直弥

## 6 その他

### 「地域との合同防災訓練」

#### 1. 趣 旨

「前橋市地域防災計画」に基づき、地域との防災訓練を通して、地域との連携協力を促進する。さらに、災害時における安全な避難方法や必要とされる防災グッズの内容について学び、防災・減災を担う拠点としての役割を地域住民に理解していただくとともに、職員の受け入れ態勢の確認を行う。

#### 2. 事業の概要

	午 前	午 後
11月	・防災アドバイザーからの講話	・昼食、解散
20日	・ダンボールベッド組立訓練	
(月)	・災害体験訓練	

#### 3. 企画運営のポイント

- (1) 前橋市総務部防災危機管理課防災アドバイザーから講話をいただくことにより、防災意識の向上を図った。また、ダンボールベッド組立訓練や災害体験訓練を行うことで、有事への心構えを養った。

#### 4. 事業の様子



「講話の様子」



「ダンボールベッド組立訓練」



「災害体験訓練」

#### 5. 成果と課題

##### (1) 成 果

- ①前橋市総務部防災危機管理課防災アドバイザーから講話をいただいたことにより地域住民の防災意識が向上した。
- ②災害体験訓練などの例年よりも実践的な訓練を実施したことによって、地域住民の災害に対する心の準備ができた。
- ③地域住民の避難訓練を毎年行ってきたことで、地域住民に当施設へ避難する意識の定着が図られた。

##### (2) 課 題

- ①地域住民の避難を受け入れるには、施設に異常がないことが前提となる。今回はその確認訓練が十分ではなかったため、次回は状況を詳細に設定して訓練を行う。

担当：管理係主任 白石 崇尋

令和5年度 国立赤城青少年交流の家 教育事業等報告書

令和6年3月

編集・発行 独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山 27

TEL 027-289-7224 FAX 027-289-7226

URL <https://akagi.niye.go.jp/>

E-mail [akagi-kikaku@niye.go.jp](mailto:akagi-kikaku@niye.go.jp)